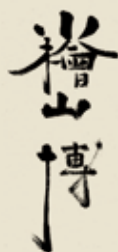
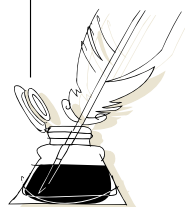


人生讃歌



滝上から来たガンマン



ぼくはなんとか小説家の端くれになれたけど、二十歳ころはほかにやってみたい空想が三つあった。一つは中学校の国語の教師、二つめは農民二揆の頭、三つめはガンマンである。ガンマンとは二七〇年ほどの前のアメリカ西部開拓期、腰に拳銃をつけて正義を守った保安官とか用心棒、あるいは賞金稼ぎをしていた人のことであるが、ぼくがなりたくないガンマンは悪いことをする者をやっつける正義漢のことである。滝上とはオホーツク海から四十キロ山奥へ入ったぼくの郷里で、九十年近く前の開拓期にここで生まれ育ったぼくだから、ガンマンが似合うと考えるのである。すこぶる解りやすい発想で何の問題もない。



混濁して見えるいまの世の中、ぼくは傘寿すぎの老残になったが、いまこそガンマンとして出発したのである。全身を黒ずくめの格好に黒いカウボーイハットをかぶり、腰のガンベルトの左右にモンブランとペリカンの二本の万年筆を投げ込み、黒い馬に跨って荒野へ歩み出したい。軽い座骨神経痛、尿酸値に不安もあるが、草木の少ない赤茶けた大地を地平線に向かいたい。こんな妙な世の中、じつとしていられない。行け

ども行けども前方に見えるのは農作物を作らないため草原化した風景で、真上には焼けつくような太陽がある中を、髭面のぼくは馬を進めたい。この日のためにぼくは二〇〇九年の十月十五日から二週間、アメリカ西部のモユメントバレー、コロラド、ユタなどガンマンの本場を見てきていたのだ。抜かりはないのである。

行き先の当てではない。家賃や食費や電気代を稼ぐため会社に行くわけでもない。こうしてはいられないという衝動による行き当たりばつたりの旅だから、原稿の締め切りのことも臍臓ガンを調べるMRI検査の予約日のことを考える必要もない。持つてるおカネは千円だけだ。三日歩き、都会という荒野にある酒場に入ってビールで喉をうるおす。それから住民に儲け過ぎの経営者や、よくない政をする人、世界の運動会で不正なおカネを手にした人を聞き出して乗り込む。ぼくは「俺は百四十年前の早射ちガンマン、ワイアット・アープの再来と言われる滝上から来たガンマンコヒヤマだ」と名乗り、彼らが不当に手にしたおカネを出させたい。そこから、ぼくと馬が一週間暮らせる額だけ借り、残りをその街の食費に困っている人たちに配り「達者で暮らせよ、あばよ」と言ってまた馬に跨って荒野へ出て行きたいのである。ぼくは流れ者の早射ちガンマンだが、一度として腰のものに手をやったことがない。名人なのである。



ぼくは炭焼き小屋で生まれて貧農に育ち、都会へ出稼ぎに出、新聞社で働いてきた。容姿が劣り知恵もとぼしく、劣等感と自己嫌悪を武器に少し物を書いてきたが、そこそこで終わりそうだ。しかしぼくは育ちは悪くて貧乏だが、本当は優しくて謙虚で正義感が強いと自分では思っている。そのく

せ自分のいいかげんさには寛大だが、他人の悪事には一言、何か言いたい気持ちがあつて情けない。

二十三歳から九年間、大都会で暮らした。毎朝毎晩、身動き出来ないほど混む通勤電車の中で足を踏まれ、突き飛ばされ「邪魔だ、どけ」と怒鳴られた。酒場で酔客に「君、どこ出身？垢抜けないねえ」と笑われ、都会で生きるには家柄と学歴と見た目がものを言うから、と言われた。神経が疲れて体調を崩したとき医者に「君には都会の水は合わないよ、田舎へ帰んなさい」と笑われたのだった。そのころからガンマンになって馬に乗り、地平線へ向かいたいと思つてた。



挿絵/中江潤一

★

さて二〇二四年九月、老廃のぼくは膝の痛みや肩凝り、左奥歯のがたつきを気にしつつ馬に跨り、大都会という荒野をめざして出発する。もちろん腰のガンベルトには二本の万年筆も入れた。黒ずくめの服に黒い帽子、口を引き締めて顎を引き、鋭い眼で前方を見つめて馬を進めた。

山を越え野を越え、津軽海峡を馬で渡り、野宿をする。何日か歩いて大都市に着いた。林立する高層ビルの谷間を自動車が無数に走り、新幹線が走っていた。ぼくは街に馬を乗り入れ、酒場に寄つてビールを飲んだ。人々に、国民の税金をだましとったり農家から農産物を不当に安く買って農家に迷惑をかけている人など百人だけ聞き出した。それからその百人のところへ行き「改心しないとどういうことになるか、わかつてゐるな」と静かに話した。腰のガンベルトは服の下に隠しておいた。そして彼らは、必ず悔い改めて正しいことをしますと誓い、正しくない手段で手に入れたという九千億円のおカネを差し出してきたのである。ぼくはそこから一週間分の食料と馬の飼料代として八千九百円を借り、あとは困っている人たちに配るよう言つて、また馬に乗った。ぼくがやりたいたことは違つていたが仕方ないと思つた。前立腺も少し変で薬を飲み飲みだったが、大丈夫だった。結局、腰のガンベルトの中のものに二度も手をやらずにすんだ。

ぼくは老骨に鞭打つて馬を進めた。少し前屈みになって顔を軽く伏せ、後ろ姿に哀愁をただよわせるよう工夫した。その姿勢は自分で気に入った。そのままぼくの馬に乗った後ろ姿は次第に小さく遠ざかつてゆき、やがて地平線に消えてしまふのである。そして最後に「ガンマンコヒヤマのその後を知る者は誰もいない」となるのである。

①